

井戸一30出土の呪符木簡とほぼ同形であり、この地方での呪符木簡の形状として一般的なものであつたことが想定される。

(5)は長方形材の上端の両肩を落として圭頭にしたもので、下端は折損している。記載文字の下二字は「一丈」と読めるので、上の文字は物品名の可能性が強い。したがつて、この木簡は草戸千軒町遺跡で多数出土しているような付札ではないかと考えられる。

これらの木簡の出土した意味について考えると、呪符木簡では符籙の異なる四点が一括して出土したことが重要である。この時代には各屋敷地に井戸が一基ずつ付属していることから、一つの家で使われていた呪符を一度に投棄したこととも考えられ、中世における呪符の盛行の一端が窺える資料といえる。また、付札とおぼしき木簡の出土は原尾島遺跡の性格を考える上で注意される。わずか一点ではあるが、商品流通に関するような資料の出土は市場的な性格を匂わせる。今後の隣接地での調査が注目される。

なお、呪符木簡の釈読にあたつては奈良大学水野正好氏の御教示を得た。

9 関係文献

岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告19』(一九八九年)

岡山県古代吉備文化財センター『所報 吉備』第七号(一九八九年)

(岡本寛久)



(2)

川崎市市民ミュージアム展示図録 『木簡—古代からのメッセージ』

一九九〇年一〇月から一一月にかけて開かれた「木簡」展の図録である。木簡の特別展は初めての試みで、全国から一五〇点をこえる木簡を集めて展示された。図録は展示品を中心とする写真図版と、平野邦雄・鬼頭清明・平川南・鈴木靖民・石井進の各氏による論考を収めた本文編よりなる。

申込先	B5判、二〇四頁、頒価一八〇〇円・送料三一〇円
	川崎市市民ミュージアム 一九九〇年一〇月刊行
同 ミュージアム TEL ○四四(七五四)四五〇〇	